トゥルバドゥールと中世イタリア文学

——ダンテ、フランチェスコ・ダ・バルベリーノとペトラルカの場合——

谷口　勇

Ⅰ. 序　文
Ⅱ. ダンテとトゥルバドゥール
Ⅲ. フランチェスコ・ダ・バルベリーノとトゥルバドゥール
Ⅳ. ペトラルカとトゥルバドゥール
Ⅴ. 結　語

Ⅰ. 序　文

地理的関係から，北イタリアと Provence は古くから交通が密接であり，政治的にも経済的にも深い関係があった。殊に Albigese 十字軍以後は，Sicilia の Federico 二世の下に，Alps を越えて避難して来る詩人達が多かった。

由来 Provence は気候温暖で地味肥沃な Midi と言われる所で，かかる気候風土と共に，古典世界を基盤とし，またアラビア文化をも包摂して，d'oc の抒情詩が生まれてきた。これは元来春祭に起源を有していたのだが，十一世紀末葉より，従来の道化師（joculatorum turba）に混って poeti d'arte（専門的詩人），即ち吟遊詩人 troubadours（trovatori）が表われて来る。[1)]

Troubadours は貴族，騎士，市民，僧侶等，種々の階級の出身者からなっていた。始めは道化的な歌謡師が諸所を遍歴していたものが，徐々に貴族の中にも浸透し，遂には封建諸君主の庇護下に隆盛を見たのである。最古の troubadour，

ポアチエ公 Guillaume 九世(Guilhem comte de Peitieu, 1071—1127)から，最後の詩人 Guiraut Riquier に至る迄約200年間に亘っている。

Troubadours の詩は，民間の歌謡を主題にしながら，独創性を盛込んで，一種特有な詩形を編み出した。Canso（または Chanso），Sirventes，Tenso，Cobla 等の諸形式があった。就中，Canso は単純な構造ながら恋愛を題材としたもので，後の宮廷風恋愛（amour courtois, cortezia）に発展する。新しい霊感を女性礼讃の中に求めた troubadours が，この形式に精魂を注ぎ込んだのは当然である。もっとも当時の恋愛詩は，心的態度に於て大いに特異性のあるものである。婦人（dame, donna）を支配者（domina）として頂き，詩人達は，臣下（vassallo）として彼女に奉仕する（servire）のである。愛するものはその美しさを讃えつつも，意志により対象への接近を抑止しなければならず，ここに生ずる苦難克服を契機として精神的純潔に迄到達せんとするのである。[2)]

このような事情の下では，donna 礼讃の詩は，勢抽象化の度を深めざるを得ない。この傾向は特に Albigese 十字軍以後顕著になり，元来，感覚的であるのを本質としていたプロヴァンスの詩は，宗教的な，Platon 的昇華へと浄化され，当時流行の聖母崇拝に同化されて行く。このようにして種々の含蓄を内包した provenzale 文学は，Torraca の言を借りるなら，十二世紀から十三世紀にかけて，「海綿の中に水が吸込まれるように」，[3)] 滔々と Federico二世の宮廷を始め，諸々の宮廷へ浸潤して行ったのである。

こうして Provence に開花した愛の詩の花粉は，イタリアに飛来し，新たな土壌の中ではぐくまれて，予期せぬ絢爛華麗な実を結ぶであろう。

C. A. Cingria は「オック語のペトラルカ的，ダンテ的抒情詩は，その全てを通して，唯恋愛だけを一つのテーマとしている。しかもそれは，幸せな，達成の栄光に輝き充たされた愛—そんな恋愛を眺めても，何も生れては来ない—ではなく，その反対に永久に充たされぬ愛であり，何処迄行っても二人の人物，即ち同じ嘆きを，八百回も九百回も千回も，繰返してやまぬ詩人と，いつ迄も『否』を言い張る美しい淑女との二人だけだ」[4)] と述べているが，イタリ

ア中世の光輝ある二大綺羅星，Dante Alighieri (1265—1321)，Francesco Petrarca (1304—1374) への troubadours の影響は瞠目すべきものがある。本稿ではこの二大詩聖の他に，余り人口に膾炙してはいないが，等しく愛の詩人であり，遙かに広く Provence 文学の影響を蒙った Francesco da Barberino (1264—1348) を加えて，これら三人の同時代人達と troubadours との影響関係に就いて，若干比較検討を試みたものである。

【註】

1) プロヴァンス語 (provenzale, provençal) の trobaire 〔単数主格〕に由来する。ラテン語の tropus，ギリシヤ語の τροπός で調子を意味する語から派生している。彼等の仕事を，'art de trobar'，或いは 'saber de trobar' とも称している。

2) Denis de Rougemont はこう云った宮廷風変愛をマニ教やグノーシス派の影響と考えて分析している：*L'Amour et l'Occident* (Paris, 1939). 猶この書の批判的展開は，M. C. D'Arcy, *The Mind and Heart of Love* (Meridian Books, 5ed., 1962) に於て詳しい。

3) イタリアの批評家，cf. P. Bec, *Petite Anthologie de la Lyrique Occitane du Moyen Age* (Avignon, 1966), p. 30.

4) Charles Albert Cingria.……M. C. D'Arcy, *op. cit.*, p. 37 より引用，傍点筆者。

Ⅱ. ダンテとトゥルバドゥール

「邪悪なイタリア人がイタリア語を腐し他国の俗語〔注，プロヴァンス語〕を激賞している」[1] と ≪*Convivio*≫ の中で激しく難詰した当の Dante も，新興の光彩陸離たる il provenzale の影響から逃れることができなかったばかりか，否，密接不離の関係にあったのである。

Dante がいた当時の文学的環境を考える必要がある。Dante の祖師 Brunetto Latini (✝1293) はフランス語で書いたし，また当時の詩人達は一般に，

Provence の troubadours の言語の完成した文学形式によって例証されて来た俗語的語法を当然のこととして使用していたのである。[2] けれども De Vulgari Eloquentia の問題は絶えず当時の文学者仲間の重大関心事であった。しかしこの問題を分析したのは Dante を以て嚆矢とする。[3] Dante の ≪*De Vulgari Eloquentia*≫から，我々はイタリア詩の起源の歴史を多く知ることができるし，また Federico 二世 (1194—1250) の下に栄えたシチリア派と，Toscana のいわゆる清新体 (dolce stil nuovo)[4] との間の対照が読み取れる。特に troubadours の非常に繊細且つ緻密な詩法に対する， Dante の深い認識を窺知することが出来る。

Dante 畢生の大作≪*La Divina Commedia*≫も Provençal 語で書こうと考えたろうとの口碑があるにせよ，[5] ≪*Commedia*≫ の主題は troubadours の詩の模倣には適さなかった。[6] むしろ彼の≪*La Vita Nuova*≫ や ≪*Canzone*≫に於て troubadours の影響が顕著に表われて来る。

Dante が直接名前を挙げている troubadours は次の 7 名である。

1. Arnaut Daniel. *Purg*. XXVI.
2. Aimeric de Belenosi. *V. E.* II.
3. Aimeric de Peguilhan. *Ibid.* II.
4. Bertran de Born. *Inf*. XXVIII ; *Conv.* IV ; *V. E.* II.
5. Folquet de Marselha. *Par*. IX ; *V. E.* II.
6. Guiraut de Borneill. *Purg*. XXVI ; *Conv.* IV ; *V. E.* I, II.
7. Peire d'Alvernha. *Ibid.* I.

この表の中に，イタリア出身の Sordello da Goito を加えることも出来よう。以下に於て Dante が特に関心を寄せていると見られる主な troubadours の個々につき，具体的に検討して行き度い。

i) Bertran de Born (ca. 1140—ca. 1215)

Périgord に近い Hautefort の領主。[7] 数ある troubadours の中でも，最も初期の且つ最も著名な一人である。 Dante は *Inferno* に於て，「私が幼君に

悪事を勧め，その父子を同士打にした Betram dal Bornio だ」[8] と言わせているが，これは英王 Henry 二世（1133—89）の王子 Henry（1155—83）を唆して父王に離反させたことを指したもので，このことは Provençal 古伝記にも書かれていることである。[9] Dante の資料はこの辺にあるようだ。

Inferno では更に，首のない胴（un busto senza capo）が歩きながら，Virgilio 等を一瞥して「ああ悲しい」[10] と嘆かせているが，これは父子を背かせた報いからである。

Dante はまた，Bertramo dal Bornio を寛大な，物惜しみしない王公の中に数えている。[11] ≪*De Vulgari Eloquentia*≫に於ては，優れて戦争詩人であった Bertramus de Bornio の Sirventes の詩を引用している。

'Non posc mudar c'un cantar non exparja'[12]

（私は詩を詠まずには居られないのだ。）

Bertran の詩は今日約40篇残っているが，殆ど好戦的な心情を披瀝したものである。

… Et ai grant alegratge
Quan vei per champanha renjatz
Chavaliers e chavals armatz.

（**大意** 戦場に武装した馬や騎士達が勢揃いしているのを見るのはこの上ない喜びだ。）

この短い引用でも Bertran の真髄をよく示して呉れる。彼は愛よりも強暴さと憎悪に，より多くの霊感を得た点が，他の troubadours とは全く異なっていたのである。されば Dante が地獄の苛責の下に配したのも頷けるであろう。

ii) Folquet de Marselha (ca. 1180—1231)

古伝記によると，彼は Genova の商人の息子で，莫大な遺産を相続した。風流を好み，王公に仕えたが，殊に Richart 王，Toulouse の Raimon 伯，Marseilles の Barral 子爵から愛顧を得た。Barral 子爵夫人に捧げた愛は，夫人からは余り顧みられなかったらしい。

Folquet の仕えた王公や婦人が次々に亡くなると，彼は世捨人となり妻子と共に1200年に，l'ordre de Cistel に入った。後には Tolosa の司教に迄なっている。[13)]

≪*Commedia*≫に於て，Dante は Folquet に次のように語らせている。

Di quella valle fu' io littorano,
  Tra Ebro e Macra, che per cammin corto
  Lo Genovese parte dal Toscano.
Ad un occaso quasi e ad un orto
  Buggea siede e la terra ond' io fui,
  Che fe' del sangue suo già caldo il porto.
Folco mi disse quella gente a cui
  Fu noto il nome mio; e questo cielo
  Di me s'imprenta, com' io fei di lui;
Chè più non arse la figlia di Belo,
  Noiando ed a Sicheo ed a Creusa,
  Di me, infin che si convenne al pelo ;
Nè quella Rodopeia, che delusa
  Fu da Demofoonte, nè Alcide
  Quando Iole nel cor ebbe richiusa.

(*Paradiso* IX. 88—102)

(**大意** 私は短かい流れでジェノヴァ人をトスカナ人と分けるエブロ河とマクラ河の岸に〔注，Marseilles のこと〕住んでいた。ブッジェアと，かって自分の血で港を熱くした私の生まれた土地〔注，Marseilles のこと〕では，日の出と日没はほぼ同時に起る。私の名前を知っていた人々は私をフォルコと呼んだ。私は天が私に極印したように，今天に印を捺している。その訳はシケオやクレウザに対して苦しみを与えたベロの姫も，デモフォオンテに欺かれたロドペィアや，またイオレを心に秘めていた頃のアルチーデでも，青春にふさわしかっ

た頃の私以上に強く恋に燃えはしなかったからだ。)

ここに言う天の極印とは勿論金星天(Venus)のことで，この天の影響で地上で恋愛生活に耽ったことを告白している訳である。[14] 唯，更に注目すべきは，Folquet の当時の情熱を Aeneas に対する Dido, Phyllis の Demophoon, Alcides の Iole に対するそれと対照させていることである。これは前記古伝に記されている，Folquet が仕えた三人の領主（夫人）のことを仄めかすものと考えられている。Dante はまた，Folquet のことを "luculenta e cara gioia"(光り輝く高価な宝石)[15] と呼び，"l'altra letizia"（もう一つの喜び)，[16]あるいは "beato spirito"（至福なる魂)[17]と迄も呼びかけたりしている。

Folquet の文学上の評価は≪*De Vulgari Eloquentia*≫に於て見出し得る。即ち「味わいがあり，優美な趣があり，巨匠の域に到達せる秀抜な詩人」[18] の一人として Folquet が挙げられて居り，彼の gradus constructionis excellentissimus の例としては，

'Tan m'abellis l'amoros pensamen.'

（愛の思いが私をかくも楽しませる。）

の一行が引用されている。数ある Provence の詩人の中で Folquet のみが *Paradiso* に入る光栄に浴していることと併せて，Dante の Folquet に対する心酔ぶりは如何ばかりであったか，分かろうと云うものである。

iii) Arnaut Daniel (fl. ca. 1180—ca. 1210)

隠微な創造（trobar clus）の詩人として著名な Arnaut について，伝記作者は，彼が Périgord の Ribérac の貴族の出身であること，文学を好み，trobar を嗜み，troubadour になったこと，Gascogne の貴婦人である Guilhem de Bouvilha の妻を愛したが，愛の権利により Arnaut を喜ばせてはくれなかったらしいこと，等を語っているに過ぎない。[19]

特筆すべきは Dante が *Purgatorio* に於て，Arnaut をして Provençal 語でその心緒を語らせていることである。

Tan m'abellis vostre cortes deman,

Qu'ieu no-m puesc, ni-m voil a vos cobrire.
Ieu sui Arnaut, que plor, e vau cantan,
Consiros vei la passada folor,
E vei jauzen lo jorn qu'esper, denan.
Ara vos prec per aquella valor,
Que vos guida al som de l'escalina,
Sovenha vos a temps de ma dolor.

(*Purgatorio* XXVI. 140—147)

(**大意** 君の丁重な質問が大変嬉しくて，君に隠すことが出来ないし，また隠したくもない。私がアルノーだ。泣いたりまた歌って行き，過去の愚行を苦く思い，前途に翹望する日を見て喜んだりしている。この階段の頂上に君を導く徳にかけてお願いする，時には私の苦悩を思出して呉れ給え。)

Dante はここで Arnaut を浄罪界第七圏の苦行者の群に入れているが，また一方では清新体の創始者 Guido Guinicelli をして，「私が君に指さす魂は（そして彼はその前にいた魂を指し示した）母国語の最高の練金術師だった。愛の詩や小説の散文に於て一頭地を抜いている……」[20] と言わしめた程，正に絶讃を惜しみなく浴びせているのである。

Dante は≪*De Vulgari Eloquentia*≫に於て Arnaut を恋愛詩の代表者に位置づけし，[21] "L'aura amara fol brancuz/clairir"[22] を例に挙げている。ちなみにこの詩の第一節を Lavaud 版より引用して鑑賞に供したい。

L'aur'amara fa'ls bruoills brancutz
Clarzir, que'l doutz espeissa ab fuoills,
E'ls letz becs dels auzels ramencs
Ten balps e mutz pars e non pars;
Per queu m'esfortz de far e dir plazers
A mains per liei que m'a virat bas d'aut,
Don tem morir, si'ls afans no m'asoma.[23]

（**大意**　木枯らしは微風が繁茂させた木々の葉を落す。一対の或いは離れ離れの陽気な小鳥達はその嘴を閉ざし，木枝の中で最早囀らない。だから私が歌って，私の言葉と仕草でもって，私を天辺からつき落した婦人を讃美して，多くの人々の気に入ろうと骨折るのだ。若しも彼女が私の苦悩に鳧をつけてくれなければ，そのために私は死ぬかも知れぬのだから。）

≪*De Vulgari Eloquentia*≫に於て，diesis もなく volta もない詩を作った詩人として Arnaut が挙げられているが，[24] 押韻を持たぬ stanza を使用した例としては，

'Sem fos Amor, de joi donar.'

（若し愛が悦びを与える程に寛大ならば。）

が挙げられ，また，Dante はこれを模倣して，

'Al poco giorno, ed al gran cerchio d'ombra.'

（日は短かく，影の圏は大きく。）

の Canzone を作ったと言う。[25] その他，illustres cantiones に組入れらるべきものとしては，前述の Folquet と並び，Arnaut からは，

'Sols sui che sai lo sobraffan, chem/sorz.'[26]

（ただ私のみが堪難い心の悩みを知っている。）

が引用されている。

iv)　Sordello (ca. 1200—1270)

イタリア人 troubadours の中で一番有名な Sordello は Mantova に近い Goito の生まれである。従って Sordello da Goito と称せられる。長じて Ricciardo di San Bonifazio 伯の邸に入る。伯は Ezzelino II da Romano の娘 Cunizza (cf. *Par.* IX. 32) と結婚していたが，1226年頃，Sordello は Cunizza と恋仲になり，彼女の兄 Ezzelino III (*Inf.* XII. 109ff.) の黙過の下に Ezzelino の宮廷に駆落した。後，兄の憤りを避けるために Provence に逃げ，Raymond Berenger IV (*Par.* VI. 134) の宮廷に長らく滞在した。ここで Sordello は Berenger 伯の家令 Romieu de Villeneuve (*Par.* VI. 128) と懇意になった。

Raymond 伯の死後は Charles d'Anjou (*Purg.* VII. 113)[27] の宮廷で数年を過ごした。Carloが1265年 Sicilia 王国占領の為に遠征した時には Sordello も同行した。

古伝記によると，Sordello は人好きのする性格で，良き歌い手であり，Provence の詩に優れ，また恋愛問題が絶えなかったらしい。[28]

Dante は Sordelloを死に臨む迄悔改めをしなかった者が居る Antepurgatorio（浄罪界前域）の中に配している。[29]

… O anima Lombarda,
Come ti stavi altera e disdegnosa,
E nel mover degli occhi onesta e tarda!
(*Purgatorio* VI. 61—63)

（**大意** ロンバルディアの魂よ，君の容姿は何と気高く何と厳めしいことよ。君の眼の動きは何と真摯な，何と遅いことよ！）

Sordello の口は重く，Virgilio が近付き尋ねても問に答えなかったが，Dante の案内者が Virgilio であることを知ってからは，嬉しさの余り相抱擁する。[30] それから Virgilio が浄罪界への門へ二人を導いて呉れるよう懇請すると，Sordello は彼等の案内役を引受ける。そして彼等に，現世の偶発事件によって懺悔の機会を奪われてしまった多くの王や王子を指摘して歩く。[31] この Antepurgatorioに於ける Sordello の役割は，彼が Blacas[32] の死に寄せた≪*Planh*≫から Dante が着想を得たものであろうと一般に考えられている。唯，Sordello が≪*Planh*≫に於て話しかけた satire は，心底の激しさに於てよりも，形式の奇抜さの故に著名であった。

Anglade も言う如く，Sordello のこの satire は，Dante が *Purgatorio* の中で，高慢で侮蔑的な態度をこの詩人に賦与するのに十分であったろう。[33]

≪*De Vulgari Eloquentia*≫に於ては Mantova 出身の Sordello が，詩を初めとしてその他一切の著述に於て，本来の方言を揚棄して，文学で名を成した人々の中に数えられている。[34]

【註】

1) Dante, *Convivio*, I, 11.…A perpetuale infamia e depressione delli malvagi uomini d'Italia, che commendano lo Volgare artrui, e lo proprio dispregiano,…

2) R.Briffault, *Les Troubadours et le Sentiment Romanesque*(Paris, 1945), p.142.

3) J. Anglade, *Les Troubadours, —— Leurs Vies • Leurs Œuvres • Leurs Influences——* (Paris, 3ed., 1922), p. 241.

4) 十三世紀後半に栄えた，ボロニア派の Guinicelli が，従来のマンネリズム的な詩風を不満として打立てた新しい詩体。

5) R. Briffault, *op. cit.*, p. 142.

6) J. Anglade, *op. cit.*, p. 241.

7) Cf. *Inf.* XXIX. 29… colui che già tenne *Altaforte*. (イタリック筆者)。

8) *Inf.* XXVIII. 134.

9) J. Boutière et A.-H. Schutz, *Biographies des Troubadours—textes provençaux des XIIIe et XIVe siècles*—(Paris, 1964), p. 65.…Seingner era totas ves quan se volia del rei Enric e del fill de lui, mas totz temps volia que ill aguessen guerra ensems, lo paire e'l fils e'l fraire, l'uns ab l'autre.

10) *Inf.* XXVIII. 119—123.

11) *Conv.* IV. 11^{128}.

12) *V. E.* II $^{79-85}$.

13) Cf. J. Boutière et A.-H. Schutz, *ed. cit.*, pp. 470 ff.

14) この天の影響を蒙った者には Folquet の他, Charles Martel, Cunizza da Romano, 遊女の Rahab が挙げられている (*Par.* IX)。

15) *Par.* IX. 37.

16) *Ibid.* IX. 67.

17) *Ibid.* IX. 74.

18) *V. E.* II. 6^{44-46} …Est et sapidus et venustus, etiam et excelsus, qui est dictatorum illustrium.

19) Boutière, *ed. cit.*, pp. 59 ff.

20) *Purg.* XXVI. 115.

21) *V. E.* II. 2^{80-81}.

22) *Ibid.* II. 2^{87-89}.

23) A. Berry, *Anthologie de la Poésie Occitane* (Paris, 1961), p. 39 に於ける引用から取った。

24) *V. E.* II. 10^{24-8}. diesis とは調子の転移を，volta は回転を意味する。

25) *Ibid.* II. 13^{8-14}.

26) *Ibid.* II. 6^{61}.

27) colui dal maschio naso. Carlo I d'Angiò のこと。

28) Boutière et Schutz, *ed. cit.*, p. 566.…E fo avinens hom de la persona, e fo bons chantaire e bons trobaire, e grans amaires;…

29) Cf. *Purg.* II.174; VIII. 38, 43, et passim.

30) *Ibid.* VI. 69—75; VII. 1—14.

31) *Ibid.* VII. 3—136.

32) Raymond 伯の Provençal 直臣の一人，1235年没。

33) Cf. Anglade, p. 240; K. Vossler, *Medieval Culture—An Introduction to Dante and His Times* (New York, 2ed., 1958), vol. II, p. 66.

34) *V. E.* I. 15^{9-14}…ut Sordellus de Mantua sua ostendit, Cremonae, Brixiae, atque Veronae confini: qui tantus eloquentiae vir existens, non solum in poetando, sed quomodocunque loquendo patrium vulgare deseruit.

III. フランチェスコ・ダ・バルベリーノとトゥルバドゥール

Francesco da Barberino di Val d'Elsa は Dante に先んずること一年，1264年に生まれた。Firenze 及び Bologna に於て公証人として活躍したが，またその傍，この両市の文学的雰囲気に触れた。後にフランスに数年滞在したが，ここでフランス文学やプロヴァンス文学に親しむことになる。彼の生涯や作品には，Dante の生涯や作品と多くの共通点が見られ，[1] Brunetto Latini の薫陶を受け，また後には Cavalcanti (ca. 1255—1300) や Cino da Pistoja (ca.

1270—ca. 1336）等の 'dolce stil nuovo' の新鮮な詩風に馴染んだ。Dante からの影響が深いことは，Barberino の代表作たる ≪*Documenti d'Amore*≫ への『注解』（≪*Commentario*≫）に於て殊に明らかである。[2] ≪*Documenti*≫ は，Ortiz に従えば，1308年頃から1318の間に書かれたもので，イタリアに於て既に着手され，フランスに於て完成したものらしい。[3] Docilità（従順），Industria（勤勉），Prudentia（慎重），Gloria（栄光），Giustizia（正義），Innocenza（純潔），Gratitudine（喜悦），Eternità（永遠）の十二の徳を表わすのに十二人の淑女を配したアレゴリーである。プロヴァンス風に，ここでは愛（Amore）とは至高善で，神聖なるもの，生命の根源を言表わしている。この書は，後述の Petrarca の『愛の勝利』≪*Trionfo d'Amore*≫ に多くの示唆を与えることになる。[4] また，十二・三世紀のプロヴァンスの詩史としても貴重な資料になっている。

Firenze に帰ってから，Barberino は未完成だった≪*Del Reggimento e Costumi di Donna*≫を書上げた。ここに於ては，様々の年代や境遇にある婦人の最高に生きる方法が説かれている。≪*Documenti*≫ を完成してから17年後に，彼はその『注解』≪*Commentario*≫を書終えたらしい。[5]

先蹤 Dante の陰に隠れて余り知られてはいないが，Dante 時代の優れた文学者として，Francesco da Barberino を看過する訳には行かない。幸い Antoine Thomas の画期的研究[6] が出版されて以来，プロヴァンス文学と中世イタリア文学の関係に於て，Barberino が為した寄与の大きいことが認識され出した。以下 Thomas の考証を中心に，Barberino と troubadours につき，若干検討して見ることにする。[7]

今，≪*Commentario*≫の中に表われた troubadours を挙げると次の如くなる。

1. Aimeric de Peguilhan. *Cod.* F° 84^{c}.
2. Arnaut Catala. *Ibid.* F° 11^{b}.
3. Arnaut de Maroill. *Ibid.* F° 84^{c}.
4. Azemar de Rocafica. *Ibid.* F° 35^{b}.

5. Bertran de Born. *Ibid.* F° 7[d].

6. Contessa de Dia. *Ibid.* F[os] 11[b], 35[d], 52[b], 68[d].

7. Folquet de Marseilha. *Ibid.* F[os] 8[d], 39[b], 63[b], 86[b].

8. Gaucelm Faidit. *Ibid.* F° 35[c].

9. Guilhem Ademar. *Ibid.* F[os] 9[b], 14[c], 35[b].

10. Guilhem de Berguedan. *Ibid.* F[os] 7[d], 8[d], 9[d], 12[a].

11. Guilhem Magret. *Ibid.* F° 11[b].

12. Guiraut de Borneill. *Ibid.* F[os] 19[c], 35[b], 74[c].

13. Jaufre Rudel. *Ibid.* F° 14[c].

14. Lo Monge de Montaudon. *Ibid.* F[os] 11[b], 35[c], 35[d], 42[c].

15. Peire Raimon. *Ibid.* F[os] 9[a], 10[b], 35[b].

16. Peire Vidal. *Ibid.* F[os] 11[b], 16[a], 91[c].

17. Peirol. *Ibid.* F[os] 25[a], 71[d].

18. Raimon Jordan. *Ibid.* F° 73[c].

19. Raimon de Miraval. *Ibid.* F° 25[b].

20. Raimon Vidal. *Ibid.* F° 84[c].

21. Uc Brunet. *Ibid.* F° 35[c].

合計21名。いずれも十二世紀乃至十三世紀初頭の，プロヴァンス文学の最盛期に活躍した詩人達である。これらの中から，特に興趣ある troubadours を抜粋して行き度い。

i） Lo Monge de Montaudon (ca. 1180—1200)

古伝記の伝える所によると Orlac (Aurillac) の近くにある Vic と云う城館に生まれた貴族で，長じて Montaudon の修道院長となった。彼の詩才は諸国の貴顕から認められ，大きな名誉を得た。諸公は彼が欲するものを何でも与えたと云う。彼はこれを全部 Montaudon の修道院に持帰った。

長らく la cort del Puoi (Cour du Puy) に留り，次いでイスパニアの Vilafranca (Villefranche) 修道院に赴き， Aurillac の修道院長の世話になっ

た。晩年はイスパニアの君主，諸候から尊崇されてその一生を閉じた。[8)]

Barberino は Monge de Montaudon の言葉として，「ある婦人を真の友人として愛することが不倫なことだと誰が証明しよう。自分の為に友人を愛するとすれば，それは（真に）愛していることにはならぬ。友人だけの為に愛してこそ（真に）愛することだ。若し友と私の為に友を愛するならば，友を更に愛することになろう。しかしそれが私の為であって，友の為でないならば，友人を憎んでいることになる。」「同様に私の婦人を私の為に愛するのは，彼女の気に入るように悪事から身を遠避け，徳行に執心し，かくして快適な生活を行なうことが出来るようにするためである。私が彼女の為に愛するのは，彼女を尊敬し，彼女の名前と名声を賞揚し，恰もこれが私の友人の名誉であるかのように彼女の名誉を守る為である。そして若し偶然に人間の儚さの為に並はずれた欲望が私の内部に生じたとしても，彼女への愛の力でこの欲望を押えるであろう。何故なら私が欲望を持ちながら，これを押えることは，これを持たぬことよりも，一層有徳なことになるであろうから。」[9)] と云う話を伝えている。これは Cicero の『友情論』≪*De Amicitia*≫を思わせる論議だが，ここに見られる精神主義と軌を一にするものに次の歌がある。

> "Magis te sequor, Amorem (sic), ut sis michi frenum ad vitia et semita delectaebilis ad virtutes quam ut tui principii vi fuerim tractus ac gloriam."　(*Commentario*, f°35c)

（**大意**　愛よ，私が君に従うのは，君が私にとって悪徳に対する障壁となり，有徳への魅力ある小径となるからであり，決して君のおかげで栄光に到達せんが為ではないのだ。）

Barberino はまた次のような話も引用している。「誰かから，取分け同類の者から尊敬のしるしを受けたならば，機会が来た時に同じことをし返しすれば良い。」[10)] Novellino の形式で Monge de Montaudon が伝える話として，Messer Francesco は次のような興味あるエピソードを書いている。

「モントードンの僧の話。トゥールーズの伯爵が生きていた時代にウゴネッ

ト殿下と言う名の騎士の一人が，モンペリェの町で伯爵の夫人と一緒にいる所を見つけられ，町人により伯爵の前に引連れられて来た。ことの次第を尋ねられたので，騎士は一部始終を打明けた。伯爵はそこで言われるのに，『君はどうしてこのように，私の名誉もお前の名誉も台なしにするようなことをしたのだ』，騎士はこれに答えて，『閣下，私の致しましたことは，あなた様の騎士も従者も皆やっていることでございます。』そこで伯爵は正義が発揮されるよう命令を出してから，次のように言われた，(『邪まな例がお前に過ちを犯すよう誘惑すべきではないし，君の過ちを他人の例で被ってもいけない。何故ならこの例はお前を弁護するよりもお前を責めるものだからだ，真の徳は悪人の中でも善良であることにあるのだ。』)」。[11]このような小咄は，Provençal 語による原文が最早散佚しているだけに，益々貴重なものになっている。

ii) Guilhem Ademar (?)

Ademar は Javaudan (Gévaudan) の Maruois (Meyrueis) の出身。Meyrueis の領主が彼を騎士にした。彼は勇敢で口達者であったが，また詩を能くし，騎士の身分を保持することが出来ず，troubadour となる。上流社会から尊敬され，後に l'ordre de Graumon に入った，と古伝記に記されている。[12]

Barberino は≪*Commentario*≫に於て，Bertran de Born, Bernart de Ventadorn, Guiraut de Borneill, Guilhem de Berguedan 等と一緒に彼を並べている。[13] 現在伝播している彼の詩は少ないのだが，Barberino が生きていた当時の Firenze には Guilhem Ademar の作品が人口に膾炙していたと思われる。

> "Vir probus esse? Ama et perfectus eris, quia ut illi placeas quam amabis, omnibus servies et placebis, sperans ex fama tua ipsius aures repleri".[14]

(**大意** 立派な騎士になりたいって？恋をしなさい，そうすれば完全な人になるだろう。何故なら君の愛する婦人に気に入られる為に，君の名声が君の耳を充たすことを望んで，君は皆の気に入られるようにするだろうし，従ってまた皆の為に奉仕することにもなるだろうから。)

このような "amour courtois" の基本を直載に教えている詩の原文も，当時の Firenze の巷間には流布していたらしいが，今日では見るべくもない。

iii) Guilhem de Berguedan (?)

古伝記の伝える所では，彼は Catalonia の貴族で，また立派な騎士でもあった。しかし，Raimon Folc de Cardona を殺した為に財産を没収されてしまった。両親や友人に援助されて生活したが，皆を痛罵して遂には孤立してしまった。彼は人々を，一方では誉めそやし，他方では毒舌を振ったりしたが，自分の愛を受入れて呉れた婦人についてはこれを誉め称えた。武器や婦人の大事件，その上大災難が彼に降りかかった (Mout li vengon grans aventuras d'armas e de dompnas e de grans desaventuras)。遂には歩兵に殺されてしまった。[15] この伝記からも Berguedan の Don Juan ぶりが窺えるが，Barberino の伝える次の話もこれに劣らず興味あるものである。Barberino は婦人と会合する場合の話題に，恋愛問題を禁じているのに対し，Berguedan はこれを奨め，また他の個所では，会食者の位置に関して Barberino は愛人達が坐席を別にするよう奨めるのに対して，Berguedan はダンスの場合と同じく，テーブルでも側または向合って腰掛けることを勧める。[16] そして更に，「人は Berguedan を引合に出すが，彼は婦人達の不名誉以外に何か捜したことがあったろうか。ある時，彼が本を持っていたので，どこへ行くのかと誰かが公衆の面前で尋ねたのに対して，『花環をあげるから誰にもそのことを暴露しないよう，私に誓わさせようとする，ある婦人の所に（行く所だ）。』と答えた」[17] と言う。上記古伝記の穿鑿する所を斟酌すると，Berguedan は余り後世に推奨されるような人物ではなかったことが分かろう。他の引例では，

> Fertur dominus Guillelmus de Bergadam dixisse quod in talibus vilibus allevianda erant onera cogitandi, ut ad utilia facilior esset actus.[18]

（**大意** 有益なことに没頭できるように，無意味なをことでくよくよすべきではないとベルグダンが語ったと云われている。）

の如きものが見られるが，これを以て Berguedan なる人物の片鱗を窺うことも出来よう。

iv) Peire Vidal (ca. 1180—ca. 1205)

Toulouse の毛皮商の息子として生まれた彼は，詩の道に進むべく故郷を去り，イスパニアやプロヴァンス，ハンガリア，イタリア，マルタ島等を多くの貴族の庇護の下，転々と遍歴した。極めて独創的な詩人であり，陽気さとユーモアに富み，高慢で道化た所も併せ持っていた。伝記作者の伝える逸話に，「彼は Loba de Pueinautier を愛していた。……彼は彼女の為に自分を狼と呼ばせていた。そして狼の皮を着た。……その為に羊飼いやその犬共が彼を追いかけ，彼を激しく打ちつけた為に，Loba de Pueinautier の所へ死人同様になって運び込まれたが，この Loba は Vidal を見て哄笑し，完全に治癒する迄看病させた……」[19] と云うのがある。これに似た調子の話を Barberino も書いている。「馬鹿な男達が婦人に対して如何なる特権を横取りせんとするのか。彼等が自分の姿を見れば，牡山羊のように髭を生やし，たいていは鴉のように黒く，ざらざらした皮膚は水牛のようだし，熊のように毛むくじゃらだが，それでも賢明であるのは，彼等が書物を読むからであり，支配して居れるのは力が強いからだと云うことが分かるだろう。」[20]

古伝記には Peire Vidal が武勲や恋愛や中傷に関する荒唐無稽なことを沢山語ったと書かれているが，[21] Ser Francesco の記す次の話などもこのような類に属するものだろう。

「(P. Vidal 語る) ある日 Bourgogne 公爵の弟がフランスから戻って来た時，公爵は自分の妻が弟の方に駆けて行くのを見た。すると弟が胸の上に彼女を非常な心情をこめて抱擁したので，公爵はこれを見て直ちに弟と妻に対して嫌疑を起した。妻に対して，『あのような振舞は一体何たることか』と尋ねると，彼女は答えて，『あなたの弟があのように行動したのはあなたへの愛の為です。そして私は彼の為すに任せて置きましたが，別に悪いことをしたとは思いません。』『彼に向って厳しく叱責してやらなかったのだから，お前の振

舞は全く間違っていたのだ。』『私は正しくなかったと思います。』会話はここで途切れたが，数日後，公爵は弟を招き，妻の傍に坐らせ，二人にこっそり毒を盛った。三日後に彼等は死んだ。」[22]

v) Raimon de Miraval (ca. 1135—ca. 1216)

「プロヴァンスの作家 Miraval は，Flandre の伯爵が嘗て彼の騎士の一人，Raimbaut 殿下に加えた残忍な死の原因は，同騎士が伯爵夫人の前で，伯爵に仕えている時に，唯溜息を漏らしたからに過ぎなかった，と語った。」[23]

Barberino が今日残しているものはこれだけに過ぎない。古伝記の伝える所によると，Miraval は Carcases の貧しい騎士であったが，詩を能くした為に Tolosa (Toulouse) の伯爵に尊崇された[24] とある。この伝記の中で特に興味を引くのは，如何なる貴婦人でも Miraval を友としなければ，皆から尊敬されないと考えていた[25]とある個所である。P. Andraud は，「Miraval は余り推奨すべき人物ではなかったが，粋な年代記作者としての仕事に於て，芸術に熱中した人々から尊敬されるに足る才気と寛大さと，特にまた陰謀と慰籍とを存分に活用した」[26] と書いている。

vi) Raimon Jordan (ca. 1150—？)

Sant Antoni の子爵で Caerci (Quercy) にある富裕な城邑の領主。愉快で気前の好い，剣術が達者な彼は，また trobar にも秀で，想像力が豊かであったと古伝記に記されている。[27]

Jordan に関しても，Barberino は僅か一箇所で言及しているのみであるが，幸いかなり詳細なもので，恐らくは何かの物語りの忠実な飜訳と推定される。

「Raimon Jordan は，従者の中に狂人を随伴して Bourgogne を旅していた，ある伯爵夫人の話を語っている。ある場所に到着して，仲間が草の上に敷物を広げ，泉の傍で食事を始めた。この間に例の狂人は皆から外れて，そこから一里の所にある一軒の家に入った。そしてその中に一人の娘を見つけたので，彼女を凌辱しようとした。娘の叫び声を聞きつけて，村人達が大挙して殺到しこの狂人を追いかけたが，彼は逃失せて，程なく伯爵夫人のいた場所に舞戻って

来た。従者連はこの哀れな狂人が逃げて来るのを見て立上り，彼が気狂いであることを口実に，彼の許しを頼んだ。しかし騒然たる怒号の中にいて，村人達は訳が分からず，彼の引渡しを傲然と要求した。伯爵夫人の従者連はこれを拒絶した。そこでお互に摑合いになったが，従者の方は数では劣勢であった為，彼等は完膚なき迄に惨殺されてしまった。伯爵夫人とたった二人の女中だけが残った。件の娘の兄が，村人達の同意に基いて，報復として伯爵夫人を凌辱しようとしていた時，幸いにもその国の殿様が現れた。殿様の引具していた若干の家来の助けに因って，この不幸な夫人を村人達から引離し，彼女を安全な場所へ連れて行った。それから夫人が国に帰るために護衛をつけてやった。この暴挙を犯した農民の数は言うのも怖い位夥しかったので，無罪に相当した程であった。」[28)]

【註】

1) R. Ortiz, *Francesco da Barberino e la Letteratura Didattica Neolatina* (Roma, 1948), p. 19.

2) Cf. *Commentario*, f° 63.

3) R. Ortiz, *op. cit.*, p. 83.

4) Cf. Francesco De Sanctis, *Storia della Letteratura Italiana* (Milano, 2ed., 1960), Vol. I. pp. 270 ff.

5) Cf. Ortiz, *loc. cit.*

6) A. Thomas, *Francesco da Barberino et la Littérature Provençale en Italie au Moyen Age* (Paris, 1883). 因に Ortiz はこの書を評して次のように云っている。…L'opera del Thomas è di quelle, che per noi Italiani suonano acerba rampogna; la vita del Barberino vi è riconstruita, malgrado la scarsezza scoraggiante dei documenti, con una chiarezza e una perspicacità critica da far davvero meraviglia in un giovane uscito da poco dall'Università e dall'*Ecole des Chartes* e tutto ciò che si riferisce al dominio della letteratura provenzale alle frequenti menzioni, che il Barberino fa nel suo commentario ai ≪*Documenti*≫ dei trovatori

provenzali vi è studiato in modo addirittura esauriente (Ortiz, *op. cit.*, p. 22.).

7) 本稿では資料の関係上，やむを得ず考察の対象を ≪*Commentario*≫ 中に表われた troubadours に限定し（以下 *Cod.* と略），資料の特殊性に鑑み可能な限り備考に供した。

8) J. Boutière et A.-H. Schutz, *Biographies des Troubadours*, pp. 307 ff.

9) *Cod. cit.*, f° 35d, Thomas, p. 184.…"Quis probabit illicitum dominam ut verum amicum amare? Si amicum amo propter me solum, non amo; si propter eum, amo; si propter me et illum, amo; si propter me et contra eum, hodio illum gero."—"Amabo, inquid, dominam meam propter me, ut a viciis, quasi quadam delectatione sibi placendi, abstineam et virtutibus inheream vitamque meam jocundam conducam; propter eam etiam, ut honorem et exaltem nomen et famam suam ipsiusque honestatem, ut honorem amici mei, custodiam. Et si quis forsan ex humana fragilitate appetitus in me inordinatus insurgat, illum ejus amoris virtute confringam, ut major in me virtus sit appetere et conterere, quam nec appetere nec refrenare."

10) *Ibid.*, f° 11d, Th., p. 175.

11) *Ibid.*, f° 42c, règle XXXII, Th., p. 187.…Ponit monachus de Montalto quod tempore status comitis Tollosani, quidam ex suis militibus nomine dominus Ugonectus nocte quadam in Montepesulano cum quadam uxore alterius captus fuit et deductus ad comitis presentiam per burgenses. Quem cum comes interrogaret de istis, confessus est totum; sicque comes dixit ad eum: "Et quomodo ausus es honorem nostrum sic postponere atque tuum?" Respondit miles et dixit: "Domine, illud quod feci faciunt omnes milites et scutiferi tui." Deinde comes, obmissis aliis que fecit circa justitiam contra eum, dixit testum regule presentis. (　)内は *Cod.* に見当らないので Thomas の仏訳から採った (*op. cit.* p. 111.)。

12) J. Boutière et A.-H. Schutz, *ed. cit.* pp. 349 ff.

13) *Cod. cit.*, f° 9d, Th., p. 172.

14) *Ibid.*, f° 35b, Th., p. 183.

15) Boutière et Schutz, pp. 527 ff.

16) *Cod. cit.*, f° 7d, Th., p. 172.

17) *Cod. cit.*, f° 12a, Th., p. 175.…Dictus autem dominus Guillelmus, quem allegavit, nunquam nisus fuit ad aliud nisi ad vituperium dominarum; qui semel portans librum publice interroganti quo iret inquid: "Ad dominam talem, cui antequam conferat michi sertum me jurare convenit quod nulli homini revelabo."

18) *Ibid.*, f° 7d, Th., p. 171.

19) Boutière et Schutz, pp. 368—369. …Et el si amava la Loba de Pueinautier…, e Peire Vidal si se fazia apelar Lop per ela e portava armas de lop. …E li pastor ab lur cans lo casseron e'l bateron si en tal guiza qu'el en fo portatz per mort a l'alberc de la Loba de Pueinautier.

20) *Cod. cit.*, f° 11b, Th., p. 175. …quid prerogative querunt quidam insensati viri cum dominabus earum? Respiciant se barbatos ut yrcos, nigros pro majori parte ut corvos, crudos corio ut bufalos et pilosos us ursos, se scientes quia legunt, se preesse quia fortiores sunt; …

21) Boutière et Schutz, p. 351. … e majors fulias dis d'armas e d'amor e de ma dir d'autrui.

22) *Cod. cit.*, f° 16a, Th., p. 177. …Refert Petrus Vitalis quendam olim fratrem ducis Burgundie venientem de Francia occurrentem sibi ducis uxorem hoc modo amplexando strincxisse, quod intuens dux suspicionem concepit in animo contra fratrem pariter et uxorem. In sero vero inquid uxori: "Unde tibi est talem morem servare?" "Illa quidem respondit; "Ex vestri intuitu frater vester hoc servat; ego autem paciens non deliqui." At ille dixit: "Immo penitus deliquisti, cum in ejus faciem nullam injuriam intulisti." Tunc illa dixit: "Non credo quod decuisset." Quieverunt verba, et die quadam dux ipse postea invitato fratre ac cum uxore locato, ipsis ambobus paravit occulte venenum et infra triduum defecerunt.

23) *Ibid.*, f° 25b, Th., p. 181. … Refert Miraval provincialis quod crudelis mortis quam intulit olim comes Frandrie (sic) in dominum Raembaud, militem suum, causa fuit quoddam suspirium quod ille miles emisit dum serviret eidem, presente domina comitissa.

24) Boutière et Schutz, pp. 375ff.

25) Boutière, *loc. cit.*, …per que neguna no crezia esser presiada, si no fos sos amics Raimons de Miraval.

26) P. Andraud, *La Vie et L'Œuvre du Troubadour Raimon de Miraval—Étude sur la Littérature et la Société Méridionales*— (Paris, 2 éd., 1902), pp. 161…162.

27) Boutière, p. 159…Raymun Jorda fo fo vescom〔s〕 de Sant Antoni, senher d'un ric borc qu'es en Caersi; e fon avinens e larcs e bos d'armas, e esaup trobar e ben entendre.

28) *Cod. cit.*, f° 73c, Th., p. 193.…Recitat Raymundus Jordan de quadam comitissa que dum ipsa semel per Burgundie partes transiret secumque conduceret quendam stultum, contigit quod dum pervenisset ad quosdam campos et ibi tensis super erba toballiis juxta fontem comederet, stultus ille semotus ab aliis domum quandam per leucam unam distantem intravit tentavitque inibi quandam virginem violare. Qua clamante, numero multi habitantes villam traxerunt ad locum et fugientem secuti sunt stultum, et dum pervenissent ad locum ubi domina discumbebat, gens domine videntes stultum fugere surrexerunt et in defensam ejus ipsius stultitiam allegabant. Quod cum illi ob rumorem nequaquam intelligerent, stultum sibi dari petebant, quem cum dare non vellent, fuerunt ad bellum; gens quoque domine, quia paucior, finaliter debellata et usque ad ultimum interempta. Sole due camerarie cum domina remanserunt. Frater autem illius puelle, consentientibus ei rusticis, voluit in vindictam tentare pudicitiam comitisse, quod fecisset nisi quidam nobilis de contrata qui ad rumorem traxerat obviasset. Qui quidem nobilis, invitis multis ex illis, cum aliqua gente sua usque in locum tutum dominam conduxit illesam et datis sibi quibusdam sotiis remisit ad propria sotiatam. Rustici autem ob multitudinem peccantium remanserunt impunes, quod nequissimum est audire.

Ⅳ. ペトラルカとトゥルバドゥール

イタリア抒情詩の始祖であり，Capitol の丘で月桂冠を授かり，ヨーロッパの諸宮廷から尊重され，また，王や皇帝達から使節に選ばれた程鍾愛された Francesco Petrarca の名は，新時代の卓越せる代表者として普く知れ渡っていた。[1] 彼は生涯の大部分を Midi, Carpentras, Montpellier で過ごした。Petrarca が生きたのは，最後の troubadours が十三世紀後期に消滅してから，光彩を放ったプロヴァンスの詩の残照がまだ残存していた環境の中である。Petrarca の烱眼からこれらの troubadours が逃がれる筈はなかった。時代の寵児 Petrarca は，Alessandro Tassoni (1565—1635)，Pietro Bembo (1470—1547) を始め多くの者から troubadours を剽窃したと非難された位，卒直に troubadours の伝統をその作品の内部に摂取したのである。[2]

彼が明白に troubadours の名を出し，これに頌歌を献じているのは『愛の勝利』≪*Trionfo d'Amore*≫ IV に於てである。今これを引用しながら若干検討を加えて行き度いと思う。

Petrarca はここに於て，彼が霊感を得た詩人を「古代人」と「近代人（同時代人）」に分けている。Vergilius, Ovidius, Tibullus, Propertius, Catullus と云った愛を歌った古代ローマ詩人に引続いて，同時代人の中で最も著名な Dante と Beatrice, Cino da Pistoja, Selvaggia, それに二人の導師 Guinicelli と Cavalcanti, 最後には嘗て第一流の名声があったシチリアの作詩者達が前進して来るのを見る。

..... e poi v'era un drapello
Di portamenti e di volgari strani:
Fra tutti il primo Arnaldo Daniello,
Gran maestro d'amor, ch'alla sua terra
Ancor fa onor col suo dir strano e bello.
Eranvi quei ch'Amor si leve afferra:

L'un Piero e l'altro, e'l men famoso Arnaldo;
E quei che fur conquisi con più guerra:
I'dico l'uno, e l'altro Raimbaldo
Che cantò pur Beatrice e Monferrato,
E'l vecchio Pier d'Alvernia, con Giraldo,
Folco, que' ch'a Marsiglia il nome ha dato
Ed a Genova tolto, ed all'estremo
Cangiò per miglior patria abito e stato;
Giaufrè Rudel, ch'usò la vela e'l remo
A cercar la sua morte, e quel Guiglielmo
Che per cantare h'al fior de'suoi di scemo,
Amerigo, Bernardo, Ugo e Gauselmo
E molti altri ne vidi a cui la lingua
Lancia e spada fu sempre, e targia ed elmo.

(*I Trionfi* Ⅳ. 38—57)

(**大意**　それから異国風な挙動をし見知らぬ国の俗語を話す一団の人々[3]が続いて来た。皆んなの中で，第一番目には愛の歌の大名人アルナド・ダニエロがいた。彼はその新鮮で優美な言廻しでその国の名誉ともなっている。猶その傍には愛の神に軽く捕えられた二人のピエロ[4]がいた。それに余り知られていないアルナルド[5]もいた。将又彼等よりも長く戦った後に愛に打負かされた人達，即ち二人のラインバルド[6]もいた。この二人はモンフェラトのベアトリーチェを歌った。アルヴェルニアの老ピエルにジラルドがいた。またマルシリアに名声を与えたフォルコがいた。彼はジェノヴァを追われたが，最後にはより良き祖国の為に衣服も境遇も変えてしまったのだった。ジァウフレ・ルデルもいた。彼は帆を掲げ櫂を引いて自分の破滅を捜しに出掛けたのだった。尚且つ歌の為にその青春を縮めたかのグィリエルモがいた。アメリゴ，ベルナルド，ウゴとガウセルモ，それに多数の他の詩人達をそこに見た。彼等にとっては，

言葉が愛の戦いに於て槍や剣や楯や鉄兜の代りになったのだった。)

この詩の一節を読めば，詩人によって浮彫された鳥瞰図を見る思いがすることだろう。今ここに枚挙されている troubadours を列記して見よう。

1. Aimeric de Peguilhan (ca. 1175—ca. 1230).
2. Arnaut Daniel (do.).
3. Arnaut de Maroill (fl. 1170—1200).
4. Bernart de Ventadorn (fl. 1150—1160).
5. Folquet de Marseilha (do.).
6. Gaucelm Faidit (ca. 1180—ca. 1215).
7. Guilhem de Cabestanh (?—ca. 1212).
8. Guiraut de Borneill (ca. 1165—1199).
9. Jaufre Rudel (fl. 1140).
10. Peire d'Alvernha (1155—1215).
11. Peire Rogier (fl. 1160—1180).
12. Peire Vidal (do.).
13. Raimbaut d'Aurenga (fl. 1150—1173).
14. Raimbaut de Vaqueira (ca. 1190—1207).
15. Uc de Saint-Circ (fl. 1210—ca.1240).

総計15名の troubadours を数え得る。Petrarca のこれらの言及は速かで簡潔だが正確な点は，A. Viscardi も言っているように，Messer Francesco が troubadours の生涯と作品について如何に精通していたかを証拠づけるに十分である。[7] 今比較的興味深い troubadours に就いて若干調べて見ることにし度い。

Petrarca の上の詩からは諸般の troubadours について余り詳しい事情を知ることは出来ないが，唯一人 **Jaufre Rudel** の言及は注目すべきものがある。古伝記によれば，Rudel は非常に気品のある Blaia の王子であったが，Antiocha からやって来た巡礼者達が，Tripoli の伯爵夫人の高貴さに就いて話すのを聴い

て，未だ会ったこともないのに彼女に夢中になってしまい，彼女の為に沢山詩を作った。そして夫人に会いたさの一心から十字軍に参加し，海路へと出発したのだった。しかし船中で病気に罹り，Tripoli に到着して旅籠屋に担ぎ込まれた時は幽明境を彷徨っていた。彼のことを伯爵夫人に知らせると，彼の枕元に馳せつけ，彼を腕にかき抱いた。すると彼の方でも夫人に気付くや，聴覚と嗅覚を取り戻した。そして彼女に会える迄生延ばして下さった神を讃えた。かくして彼は伯爵夫人の腕の中で死んで行ったと云う。[8] Rougemont が指摘している如く，これは一個の伝説に過ぎぬが，"l'amour de loin" を美しく見事に歌っている彼の詩篇中より引出された伝説である。勿論彼にも現実の恋人が何人かはいた。しかしその恋人達がこの霊的事件よりも真に現実的であったかは疑わしい[9] のである。

情熱の詩人 Petrarca にとって，これ程同情を誘う挿話はなかったろう。「破滅と死を求めに出掛けた」詩人 Rudel を≪*Trionfi*≫の中で永久に記念したことは全く得心のいくことである。

前後したが，**Arnaut Daniel** を最初に持って来て，而も最高峰に位置づけしているが，これは前に見て来た通り Dante の Daniel に対する評価と合致するものである。もっとも，二大詩聖が Daniel を何故最高の讃辞で飾っているかに関しては，近代ロマン語学者に不可解な問題となっている。[10]

「愛の神に軽く捕われた」**Peire Rogier** とは如何なる troubadour であったか。古伝記では，Auvergne 地方の Clermont の教会参事会員であった彼は性質も優雅で高貴な男であったが，trobar を能くして遂に参事会員を放擲し，joglar となり Narbonne の Ermengarda 夫人の宮廷に赴いた。彼女は彼を心から持成し色々と便宜を与えてやった。彼の方では夫人に心を奪われてしまい，種々の詩篇の中に彼女を歌い込んだ。長らく逗留する内に人々は彼が彼女から恋の悦びを得たのではないかと訝った為に，夫人は世人の顰蹙を恐れて Rogier に出奔を乞うた。彼は思いに沈み，打萎れて彼女のもとを去り，Raimbaut d'Aurenga の所に行ったと云う。[11]

今出て来た **Raimbaut d'Aurenga** も亦興味ある troubadours の一人である。Peire と同じく trobar を能くし，色々と恋愛事件を惹起したが，Urgel 伯爵夫人との愛は殊に激しかった。彼女は Urgel の貴婦人の中で一番尊敬されていた。Raimbaut は夫人に会うこともなしに，彼女の美貌や有徳さを人から聴いて心を奪われてしまった。夫人の方でも同じく彼に魅了された。そこでお互に歌のやりとりが始まった。このような状態が長く続いたが，伝記作者は，夫人が既に尼さんになっていた時の話として，もし Raimbaut が会いにやって来たなら，彼に対し，「手の甲で彼女の素脚に触ると云う苦痛を与える」(il agra sufert q'el com la ma reversa l'agues tocada la camba nuda) のを楽しみにしていると語った，[12] と告げている。Rougemont は宮廷風恋愛 (cortezia) を官能的恋愛の理想化であると考え，Raimbaut の詩を引用している。それによると，女性を征服する為には残酷になることを勧め，「私の愛するものは何もない，ただこの指に合った指環を除いては」と迄歌っているが，この同じ Raimbaut d'Aurenga が貴婦人礼讃の立派な詩も作っていることを指摘している。[13] Petrarca が「恋に打負かされた」と歌っているのは恐らく Urgel 伯爵夫人との事件を指すものに相違ない。

【註】

1) R. Briffault, *Les Troubadours et le Sentiment Romanesque*, p. 161.

2) Ibid., *loc. cit.*; cf. A. Tassoni, *Considerazioni sopra le Rime del Petrarca… col confronto di luoghi de'poeti antichi di vari tempi* (Modena, 1609); P. Bembo, *Della Volgar Lingua*, lib. I.

3) プロヴァンスの詩人達のこと。

4) Peire Vidal と Peire Rogier.

5) Arnaut de Maroill.

6) Raimbaut d'Aurenga と Raimbaut de Vaqueira.

7) A. Viscardi, "La poesia trobadorica e l'Italia" (in ≪*Letterature Comparate*≫ a cura di A. Viscardi- I. Pellegrini- A. Croce- M. Praz- V. Santoli- M. Sansone-

T. Sosbelli (Milano, 1948), pp. 34—35.

8) J. Boutière et A.-H. Schutz, *Biograhpies des Troubadours*, pp. 16ff.…Jaufres Rudels de Blaia si fo mout gentils hom, princes de Blaia. Et enamoret se de la comtessa de Tripol, ses vezer, per lo ben qu'el n'auzi dire als pelerins que venguen d'Antiocha. E fez de leis mains vers ab bons sons sons, ab paubres motz. E per voluntat de leis vezer, et se croset e se mes en mar, e pres lo malautia en la nau, e fo condug a Tripol, en un alberc, per mort. E fo fait saber a la comtessa et ella venc ad el, al son leit e pres lo antre sos bratz. E saup qu'ella era la comtessa, e mantenent recobret l'auzir e'l flairar, e lauzet Dieu, que l'avia la vida sostenguda tro qu'el l'agues vista; et enaissi el mori entre sos bratz.

9) Denis de Rougemont, *L'Amour et l'Occident* (Paris, 1939), p. 76.

10) M. Raynouard, F. Diez, A. Jeanroy 等は二詩聖の下した評価に否定的である：q. v. A. Viscardi, *Storia delle letterature d'oc e d'oil* (Milano, 1962), pp. 174 ff.

11) Boutière et Schutz, *ed. cit.*, pp. 267. ff.

12) *Ibid.*, pp. 441 ff.

13) Rougemont, *op. cit.*, pp. 82—83. Rougemont は続けて，ここでは指環は忠誠に過ぎず，肉体上の貞節とは無関係だと言うことを付加えている。

V. 結　　語

以上中世イタリアの三詩人の作品から，troubadours の直接的な詞章を捜し出して検討して来たが，今度はこれを比較しながら，各々に於ける影響の度合い，特質の差違，後世への意義等を考えて行こうと思う。

先ず最初に気付くことは，Dante, Barberino, Petrarca の作品に引用された troubadours の数の相違である。即ち，Dante に於ては7名（Sordello を加えても8名），Barberino は Dante の三倍の21名，Petrarca は前二者の中間の15名となっている。[1] この数が何を意味するものかを考える前に，その内容を検討して見なければならない。

Dante が種々の troubadours に於ける調子や文体の相違を知悉していたことは，≪*De Vulgari Eloquentia*≫を見れば理解出来ることだが，彼の趣味が多様となり，また彼の文学観が完熟するにつれて，彼の好みは次第に色々な troubadours へ移って行ったように考えられるのである。[2)]

Petrarca が≪*Trionfo d'Amore*≫の中に選んだ troubadours には訳がある。即ち近代詩人の中で，彼の眼に最も顕著に映じた詩人を系統的に歌い上げたものであり，Thomas も云うように，それはイタリアの最も偉大な抒情詩人によって書かれたプロヴァンスの抒情詩の略史とも云うべきものである。[3)]

Barberino の場合はどうか。≪*Documenti d'Amore*≫を書いた意図から明白である通り，troubadours の作品は，彼にあっては，説教師が教父の諸著作に対するが如く，その時々の必要に応じて駆使して来たものであり，その選択には純粋な文学的配慮が殆ど無いと云っても良く，troubadours の詩篇を味読したと云うよりも，むしろ必要に応じて渉猟したものの中から，適当に捜し出して来たものであろう，[4)] との Thomas の想定は正鵠を穿っている。

このように考察して行くと，Dante に於ける troubadours は皆彫琢された珠玉であり，彼の文学的世界観によってしっかと定着し，Dante の精神的背骨を構築していると考えられる。次に Petrarca にとっても，Dante に劣らず，彼の文学形成の過程で troubadours の新鮮な感覚と芳香ある詩藻は多くの霊感を与えたのであり，Petrarca を通して troubadours は後世にその香気を漂わせている，と言っても強ち過言ではなかろう。

Dante と Petrarca の場合は，その作品に表われた troubadours の数の割合程ではないにせよ，troubadours の浸透の深度では，Dante が Petrarca に一籌を輸することを暗示するものであろう。

しかし Barberino に就いては，彼の≪*Commentario*≫の中に21名もの troubadours が数えられるけれども，これは恣意的性質のものであって，Dante 或いは Petrarca に適用したような評価・判断を Barberino に当嵌めれば牽強附会となろう。

Dante に於て，troubadours の影響が感知されるのは，彼等の名前が直接表われている≪*De Vulgari Eloquentia*≫や≪*Divina Commendia*≫よりも，むしろ≪*Vita Nuova*≫や≪*Canzone*≫に於てなのである。[5]

例えば，愛の効果を述べた次の Sonetto を見よう。

Negli occhi porta la mia donna Amore;
Per che si fa gentil ciò ch'ella mira:
Ov'ella passa, ogni uom vem ver lei si gira.
E cui saluta fa tremar lo core.
Sicchè, bassando il viso, tutto smuore,
E d'ogni suo difetto allor sospira:
Fugge dinanzi a lei superbia ed ira:
Aiutatemi, donne, a farle onore.[6]

（**大意** 私の婦人が眼の中に愛を運ぶと，彼女を眺める人々を皆高貴にする。彼女が通り過ぎる所では，皆彼女の方へ振向き，そして彼女に会釈された人の胸裡は戦く。かくして顔を低くし，色青ざめ，皆自分の不備を嘆き，傲慢や憤怒は，彼女の前から逃去る。婦人等よ，私を助けて彼女を称えさせ給え。）

Dante の愛に関する観念が良く看取出来よう。ここに歌われている愛は，衰退期の troubadours が辿ったのと正に同じ抽象化の過程を示すものである。

Anglade が主張するように，こう云う引証からでも容易に 'poésie courtoise' から 'poésie religieuse' への変化が会得出来ようし，縦令第一期の troubadours（例えば，B. Ventadorn, J. Rudel）から Dante が愛の概念を得て来たとしても，衰退期の troubadours が 'amour courtois' を取扱わなかったらば，シチリア派も，ボロニア派も存在しなかったろうし，また Dante の作品からは優雅さと繊細さが，すっかり消失していたことだろう。[7] ボロニア派の詩人がシチリア派に傑出していた点は想像力の優雅さ，豊富な才気にあった。[8] ボロニア派の詩人達は，彼等の規矩たる troubadours を模倣した時でさえも，その独創性を堅持していたが，就中，Dante はその第一人者だったのである。

このように Dante と troubadours の関係には，広く深いものがあり，単に具体的な言及や，明瞭な模倣の跡を捜しただけで能事終れりとする訳には行かぬことを銘記する必要がある。

Petrarca の場合も，Dante と非常に共通した点を有している。Gaspary が「Petrarca も木の上の小鳥のようには，歌うことが出来なかった。彼も亦，そのモデルを持っていた。詩人は，その悩みを嘆き，自分の婦人のことを話し，かくして自分の感情を卒直に表現しようとした。」[9] と記している通り，Petrarca にとっては Laura への情熱だけでもその詩情を吐露するのに十分だったろう。しかし，彼が troubadours を研究したことは，何ら不都合なことにはならなかったのだ。従来，彼の作品の中から troubadours を粉飾した例が夥しく取上げられて，とやかく論究されているが，[10] この類似は決して偶然の結果ではないのである。

衆知の如く，Petrarca は青春時代の10年間を南仏地方，殊に Avignon に過ごした。Gidel は，「Petrarca が Avignon に足を踏込むや否や，プロヴァンスの影響に捉えられてしまった。」[11] と迄極言しているが，確かにこの環境はこの天才の開眼に著しい影響を及ぼしたことであろう。

しかし Anglade も指摘している如く，Petrarca の若干の筆法は，ボロニア派やフィレンツェ派のイタリア詩人達から借用したものであり，これらのイタリアの詩人を通して最盛期の troubadours を知り，これを模倣した場合が多く，[12] この点は Dante がイタリアの伝統を踏襲したのと軌を一にしている。[13]

Petrarca は観念ではなく，婦人の身体を崇拝する。彼は自分の情熱の中に地上的な何物かがあるのを感じ，これらを官能的欲望と分離することが出来ない。[14] 故に，彼は Dante, Barberino 等の当代の詩人達と袂を分かち，むしろ十二世紀の troubadours へ傾斜している，[15] と考えられるのである。

Viscardi は，Petrarca が troubadours から得て来た霊感が，その詩に於て，根源的に蘇生し，奥深く覚醒した (originalmente rivissuti, profondamente rinnovati) [16] と述べているが，蓋し剴切な評言と称すべきであろう。

最後に Barberino と彼が後世に残した troubadours の意義に就き触れて置き度い。47—48頁に掲げた名録から，我々は Barberino が親炙していた troubadours の範囲を知ることができるし，それに Thomas も述べている通り，ここには有名な troubadours が全部網羅されている訳ではないにせよ，兎も角，そこに表われている troubadours は殆ど有名な詩人ばかりである。[17] 唯，ここで明白な事は，Dante が称讃を惜しまなかったのは，B. de Ventadour, A. Daniel, B. de Born 等々十二世紀のプロヴァンス詩人であったのに対し，Barberino が引用している troubadours は全部，十二世紀乃至は十三世紀初頭の詩人であると云うことである。[18]

換言すれば，これ以後の troubadours は Alps を越えてまでも，イタリアに滲透することは殆どなくなったことを示唆しているのである。

Barberino は至って不勉強な学生で，Alps の彼方をあちこちと彷徨し，その内に詩作を嗜むようになったのだが，[19] Rhône 河岸で何かの偶然に，未だ Alps を越えてイタリアに入ったことのないプロヴァンス語の写体を手にし，その中に書かれている話に興味を覚え，同時代人達にもこの楽しみを味わさせ度くなって公表することになったのだ，[20] と Thomas は想像を逞しゅうしている。兎も角，Provençal 語の原典が散逸してしまった今日，間接資料ながらプロヴァンス文学の間隙を埋める手懸を少しでも残して呉れたことに対し，Messer Francesco da Barberino に大いなる感謝を捧げねばなるまい。

イタリアに於けるプロヴァンスの詩の影響は，爾後十四世紀の間は，依然として非常に顕著である。とは云条その影響は徐々に減少し，イタリア・ルネッサンスの古典主義がこれを覆うようになる。しかし Anglade の言を借りる迄もなく，十四世紀から今日迄，熱意を籠めて多くの詩人達，歴史家達が troubadours の研究を続けてきたし，Dante, Petrarca と云った近代詩の幕を開ける二大詩聖が，中世プロヴァンスの詩に対して払った敬意を誰もやめなかったし，また今後もこの敬愛がやむことはなかろう，[21] と思われる。

【註】

1) 三人の詩人が等しく言及している troubadours は，僅か Aimeric de Peguilhan と Folquet de Marselha, Guiraut de Borneill の3名のみ，Dante と Barberino の言及に於て共通している troubadours としては，上記3名の他，Bertran de Born の計4名，Dante と Petrarca に共通の troubadours は，上記3名の他に，Arnaut Daniel と Peire d'Alvernha の計5名，Barberino 及び Petrarca 両者の言及に共通の troubadours は，上記3名の他，Arnaut de Maroill, Gaucelm Faidit, Jaufre Rudel, Peire Vidal の計7名である：q. v. p. 38, pp. 47—48, p. 60.

2) Cf. A. Viscardi, "La poesia trobadorica e l'Italia"(in *Letterature Comparate*), p. 33.

3) A. Thomas, *Francesco da Barberino et la Littérature Provençle en Italie au Moyen Age*, p. 105.

4) *Ibid.*, pp. 105—106. 例として Thomas は Dante や Petrarca が非常に高く評価した Daniel が Barberino には全く見られないことを指摘している。

5) Cf. J. Anglade, *Les Troubadours*, p. 242.

6) *La Vita Nuova* XXI. 9—16.

7) J. Anglade, *op. cit.*, p. 246. 序に，Dante が当時の俗語で書かれた詩の主題を愛であると認識していたことを示すものに，次の文がある。 … E la cagione, per che alquanti grossi ebbero fama di saper dire, è che quasi furono i primi, che dissero in lingua di Si. E lo primo, che cominciò a dire siccome poeta volgare, si mosse però che volle fare intendere le sue parole a donna, alla quale era malagevole ad intendere i versi latini. E questo è contro a coloro, che rimano sopra altra materia che amorosa; conciossiacosachè cotal modo di parlare fosse dal principio trovato per dire d'Amore (*V. N.* XXV. 40—51). Dante はまた Io mi son un che, quando/Amor mi spira, noto,… (*Purg.* XXIV. 52—53)とも云っている。

8) J. Anglade *op. cit.*, p. 242.

9) A. Gaspary, *Storia della Letteratura Italiana*, 1887, Vol. I, p. 396.…anche il Petrarca non poteva cantare come l'uccello sull'albero, anch'egli aveva i suoi modelli. …Il poeta lamenta il suo dolore, parla con la sua donna, e cosi vuole

veramente ed unicamente esprimere il suo sentimento,…

10) E. g. Ch-Ant. Gidel, *Les Troubadours et Pétrarque* (Angers, 1857)

11) Ibid., *op. cit.*, p. 97, 傍点筆者。Cf. A. Thomas, *op. cit.*, p. 160.

12) J. Anglade, *op. cit.*, p.249.

13) Cf. A. Thomas, *op. cit.*, p. 160.

14) A. Gaspary, *op. cit.*, pp. 401—402… il Petrarca non adora l'idea, ma persona della donna; sente che nei suoi affetti vi è del terreno, non li può separare dal desiderio dei sensi; …

15) Cf. J. Anglade, *op. cit.*, p. 250.

16) A. Viscardi, *op. cit.*, p. 35, 傍点筆者。

17) Thomas, p. 106.

18) Ibid., p. 107.

19) Cf. R. Ortiz, *Francesco da Barberino e la Letteratura Didattica Neolatina*, p. 19.

20) Thomas, p. 161.

21) Anglade, pp. 250—251.

参 考 書 目*

1) J. B. Fletcher, *Literature of the Italian Renaissance* (N. Y., 1964)

2) E. H. Wilkins, *A History of Italian Literature* (London, 1954)

3) F. Flamini, *Compendio di Storia della Letteratura Italiana* (Livorno, 1929)

4) 黒田正利, 「詳説イタリア文学史」上巻 (開成館, 1944)

5) 同上, 「ダンテと其時代」 (警醒社書店, 1921)

6) 同上, 「ダンテの文学思想」 (日本学術振興会, 1955)

7) P. Toynbee, *Concise Dante Dictionary* (London, 1904)

8) S.-Vivanti, *Dizionario della Divina Commedia* (Milano, 1965)

9) *Rime di Francesco Petrarca* con L'interpretazione di G. Leopardi e con note inedite di E. Camerni (Milano)

10) *La Divina Commedia di Dante Alighieri* commentata da L. Pietrobono,

3vols. (Torino)

11) J. Huizinga, *Herbst des Mittelalters* (Stuttgart, 8 Aufl., 1961；兼岩・里見共訳「中世の秋」，創文社，1964)

12) E. Köhler, *Trobadorlyrik und Höfischer Roman* (Berlin, 1962)

13) E. Lommatzsch, *Leben und Lieder der Provenzalischen Troubadours* (Berlin, 1959)

14) Ch. Camproux, *Histoire de la Littérature Occitane* (Paris, 1953)

15) E. Hoepffner, *Les Troubadours* (Paris, 1955)

16) G. R.-Dessaignes, *Les Troubadours* (Paris, 1946)

17) E. Auerbach, *Dante—Poet of the Secular World* (Toronto, 1961)

18) C. S. Lewis, *The Allegory of Love* (N. Y., 1958)

19) A. Flores (ed.), *Mediaeval Age —Specimens of European Poetry—* (N. Y., 1965)

20) シモンヅ，橘忠衛訳「ダンテ」（桜井書店，1944)

21) ダーシー，井筒・三辺共訳「愛のロゴスとパトス」（未来社，1962)

22) ルージュモン，鈴木・川村共訳「愛について」（岩波書店，1962)

23) 岩瀬他共著「文学論序説—歴史的展望と現代の方法論」（冬樹社，1965)

24) 「世界大思想全集（哲学・文芸4）」（河出書房新社，1961)

25) 「世界文学体系6，ダンテ」（筑摩書房，1962)

* 註記のものは省略した。